

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

皆さんおはようございます。議長より登壇の許可をいただきましたので、若木町、牟田の一般質問を開始させていただきます。

先般、ずっとこの議会、そして前の議会、よく聞く言葉、金がない、市もない、県もない、ないないない、何かシブガキ隊のかえ歌ができそうですね。でも、もう1つ、これは今言ったのは行政の言葉ですけども、市民からよく聞く言葉、時間がない、暇んなか、忙しか、よく聞きます。世の中、景気んよかと言いながら、この武雄市はまだまだその恩恵をもらっていない。景気はまだいい状態ではないと思います。そういう中でも、忙しい、暇んなか、せちがなかと。これは話を聞きよっぎ、自分の本来の仕事で忙しいということじゃないらしいです。それは端的には行事の多さですね。社会が複雑になり、人との多くのつき合いが出てきます。そういう中で、お父さん、お母さん、男女の隔たりなく、そういうつき合いが多数、多岐にわたって出てくると思います。地域、学校、職場のつき合い、いろんなつき合い、何々だけでなく何々も、あれだけじゃなく何々もと。ノット・オンリー・バット・オルソーですね。そういうふうに、何々だけじゃなく何々も何々も何々もといっぱい出てくるわけですよ。そういうふうな各種団体のつき合いの多さ、行事の多さというところをよく耳にいたします。

それは、何でこの質問を最初取り上げたかということ、この前、私のブログというやつにその辺のところをちょっと書き込みました。これは、ある事業があって、研修して、講師を呼んでということなんで、本当にこれが必要なのかということで、問題提起でブログを書いたんですが、私のブログというのは1日に200人か300人しか見ないんですけども、ぶわーっと書き込みがあったですね。連絡、メールもかなり多数来ました。意見のメールです。ほぼ賛同のメールが多かったんですけども。教育の原点は家庭からということで総合計画は出ていますけれども、現実にはどうなんだろうかと、いろいろメールで返信したり、聞いてみました。昔は、夜、お父さんがいない、お母さんがいないというのは、仕事で遅くなる、そして仕事のおつき合いで遅くなるというのが通常でしたけれども、今現在は仕事ではなくて、そういうふうな行事で遅くなるというのが多いというふうに聞いておりました。そのブログの中で来たのを幾つか紹介しますと、やめてもよいと思われる事業を続けているんじゃないかと。例えば、余りの多さに、夫婦そろって子供との時間がとれない。例えば、片方、何かのときには、お母さんがいなくてお父さんと子供だけ、お父さんがいなくてお母さんと子供だけ、両方というのがなかなかできないような現実が多いらしいです。とにかく行事が多いということでは言われていました。その中で、物すごく目を引いた連絡だったのは、少子化をこれに絡ませているんですね。少子化の原因のナンバーワンというのは、やはりそういう時間のとれなさ、育児の時間がとれない。もう1つは、金銭的な面というのも上位に上がりますけれども、時間がとれないと。そしたら、そういうところに原因もあるんじゃないかと。

やっぱり、少子化というのはすべてにわたって来ると思います。物すごく、メールの中で少子化と絡ませているのが8通ありました。そういうふうなのを見ていると、やっぱりひとつ一般質問でもちょっと試してみなきゃいかんのかなというふうなことです。

スクラップ・アンド・ビルドという言葉がこの行政ではよく使われます。何かをやれば何かをなくすと。そういう中で、例えば、各種団体、いろんな団体とか、いろんなつき合いがあると思います。始むつとは簡単ばってんが、やむつとは難しかと。だから、行政の場合はスクラップ・アンド・ビルドという明確な方針を出していますけれども、なかなか普通の団体は、何かをふやして別んとをやめるとしないから、どんどんふえていく一方ですというのもありました。そういう中で、何かこういうふうな見直し、そういう行事の見直しのきっかけを与えることができないだろうか。

もう1つ、例えば、例で言いますと、昨日、松尾陽輔議員の質問の中で、議場をシネマコンプレックスにしたらどうかという話が出ました。そのときの答弁では、議場をそういうのじゃなくて、良質なDVDを貸して、それを家庭で見えていただくというのも1つの方策だというふうなことを言われましたけれども、その後、またメールが来まして、せっかくそういう良質なやつも家族で一緒に見られないんじゃないかというふうなことまで言われております。

何らかの行事を見直すきっかけ、きっかけでいいんですよね。行政がこうやりなさいじゃなくて、もう一度見直すきっかけを与えることができないだろうか。例えば、仮の話、行事見直し条例とか、もちろん罰則とか何もなくてですね、ただきっかけさえ与えることができれば、各種団体で見直して、ああ、これはひょっとして要らないんじゃないか。逆もあると思います。うちは、こういうのもやんなきゃいけないんじゃないかとか、そういうのも出るかもしれません。だから、そういうきっかけを与えるというのが1つの市民に対するアドバイスじゃないかというふうに、この間のそのブログの書き込みとかメールで思いました。

ただ、ひとつここで気をつけなきゃいけないのは、地域の伝統文化、そういうのはなくしちゃいけないですね。だから、そういうところに気をつけて、そういうきっかけづくりぐらい与えるのはどうかというふうに思っております。

これも、ここで、質問で向こうに移る前に最後に1つの例なんですけれども、ある団体に入っていいと。ある団体に入っていいけど、そこは行事の余り多過ぎいけんが、入りとうなかというふうな意見がありました。例えば、今ひょっとして武雄市内でも会員不足でいる団体もあるやもしれません。そういうところでも、その1つの原因が、そこに入ったら行事が多過ぎるといふような手紙がありました。

ですから、そういうきっかけづくり、今、1つの例で言いましたけれども、行事見直し条例等々制定して、そういうきっかけを与える。大きなところでは、春祭りとかありましたよね。あれも1つの行事見直しだと思います。1つのきっかけを与えて、その中でももら

うという形でやっていただく。これは、どういうふうに執行部として考えられるでしょうか。まず第1の質問でお伺いしたいと思います。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

18年ぶりに武雄に帰ってきて、いろいろ思いましたけれども、確かに会議、あるいは行事は多いなど、人口5万2,000人にすれば多いなどというのは、率直な感想でした。それで、団体においては、暗黙の強制、行かんぎいかんやろうとかという強制とか、そして、やっぱり行政も団体もまじめかけんですね、そういう意味でどんどんやっぱり、地域のため、あるいはそこにおられる方のためどんどんふやしていくというとは、やっぱりあったと思うとですね。これはいいほうに解釈をしています。その結果、質問があったように、ふえて、どうしても家庭の時間がとれないというふうになっていると思います。

そこで私は、条例はちょっと、余りにもちょっと早いというふうに思いますので、1つのきっかけとして調査をかけたいというふうに思っております。調査をして、年内にこれを公表したい。その上で、これは行政がこうしろとか、ああしろ、団体がああしなさい、こうしなさいじゃなくて、市民が、こがん行事の多かたねというのを、バランスを見てもらって、そこで減らすような議論をまずしていただきたい、そのきっかけにしたいというふうに考えております。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

条例は早いということですがけれども、これは1つのきっかけになればと思っております。ここで私がこうやって質問すること自体も1つのきっかけになるかもしれない。市長が今言っていたところまでやっていただくと、よりさらに、きっかけですね。きっかけを与えることができるかもしれない。それをお願いしたいと思いますし、これは、平成11年でしたっけ、松尾初秋議員が質問されたと思うんですけども、それは教育のほうに特化して、行事が以前に比べたら多いんじゃないかというふうな質問もされました。やっぱり、この議会で出るぐらい、市民の声というのは高まっていると。

さっき言いましたように、私のブログに書いたとき、僕は余り、僕のブログというのはレスがつかないんですよ、余り。つくときはつくけど、つかないときは……。多分、今まで私のブログでレスがついた最高記録ぐらい、どわつついて、メールもですね、メールはその前に1回ちょっと問題提起したとき、いっぱい来ましたがけれども、その次に来るぐらいメールがいっぱい来ました。やはり市民の関心はそういうところにあるんじゃないかと。今まで、行政とそういうのは別個のものと、もちろん思われていたろうと思いますけれども、さ

つき言いましたきっかけづくりで、ぜひよろしくお願ひしたいと思ひます。

次に、今、外に向けてのきっかけづくり、行政の行事の見直しという形の、今度のうち、市役所内に向けての行事、体制の見直しについて質問、提言していきたく思ひます。

観光に特化して質問したいと思ひますけれども、昨年のおごろ、ちょうど去年のおごろ何をしていたかと。去年のおごろはみんな燃えていましたね。「佐賀のがばいばあちゃん」のロケの真っ最中。議会のほうも、何となくちょっとだけそわそわしたりして、その中で市長は先頭に立って頑張ってくれていました。市のPRをしなきゃいけない、観光に特化して武雄市の名前を売らなきゃいけない。多分、物すごくそのとき市長は、今よりも全然やけていたと思ひますね。そのときは「佐賀のがばいばあちゃん」ばかりでしたから、特化してましたから、「佐賀のがばいばあちゃん」に向けて、だあっとやられていたと思ひます。そのときは、私自身も、武雄市の変化というやつを肌で感じていました。ああ、変わっているんだなというやつを肌で感じていました。じゃ、1年後の今はどうなのかと。なぜか1年前と比べて、何か市長は精彩に欠けようごたあ気のすっですもんね。何となく。

というのは、1年前は「佐賀のがばいばあちゃん」に特化していた。それに向かつて突き進んでいた。最近は、あれもこれも、どれもこれもあれもって、市長は余り先頭に走り過ぎじゃないかと。もし、観光に特化するならば、1つのところ、もしくは2つ、3つで、市長が物すごくその部面を最高レベルに引き上げるような形でやっていかなきゃいけないと思ひるので、これから「TAIZO+TAKEO展」、11月から始まります。そういうふうな中でも、いっぱいいろんなことがあるんですね。市長は、私が1年前に感じたような、こう行くんじゃないかと、何かいっぱいやり過ぎて、何となく、全部が中途半端とは言ひませんが、何か力が発揮できないでいるような気がします。

これは、私の仮の話ですけれども、1つは、この前の日曜日、楼門朝市は大盛況でした。本当に盛況でした。「じゃらん」でも載るぐらい、佐賀の2大朝市というふうなことで紹介されるぐらい、これから伸び盛りだと思ひます。これをプロデュースしていただきましたので、そういうのに集中するとか、そして今度、きょう記者発表あるんですが、GABBA（がば） ABBA（アバ）かなと思っちゃいました。ABBA（アバ）じゃないですね。だから、GABBA（がば）はこれから物すごく、これも市長がプロデュースされていると聞き及んでいきますし、そういうのを見えています。GABBA（がば）で期待するのは、私も夢のようなことを言うかもしれませんが、太かこと言うたら、最終的には「紅白」をねらいたい。その後は、「ゆく年くる年」は楼門をばーんと映してもら。そこまでいかんかもしれんばってんが、そういうのを目指してやっていただきたい。だから、市長はいろんなことをやるよりも、そういうのに特化して頑張りたいという気持ちがあるんですよ。

「TAIZO+TAKEO展」、さっき言ったように、あれもこれもというとなあれですか

ら、そういうのはもう職員さんに任せて、担当実行委員会に任せて、市長はそういうふうな観光の目玉になるようなのに特化して突き進む。やっぱり、市長の一番似合うのは突っ走るですよ。今、いっぱいしようけんが、なかなか走りきれんでおごたあ気のすっですもんね。だから、そういうのはどうなのか。これは、そういうふうな見直しのところでぜひ聞きたかったところですので、市長の答弁をお願いいたします。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

いや、精彩がないと言われるのは、ちょっと思わんやったですけども、確かに、私も悩んでいます。私は市長、360度行政の分野をきちんと掌握する立場にもありますし、今、武雄が注目されていますので、ある意味、さっき議員がおっしゃったように特化をしていくという立場で非常に悩んでいます。ただ、武雄のいいところは、今、両副市長、ここにいますけど、この副市長制が地方自治法によって認められたと、これは大きいですね。今まで、市長が何でんかんでんしよったとがですね、かなりそういう意味での負担は軽減されていますので、だからこそ「佐賀のがばいばあちゃん」がうまくいったと思いますし、市も着実に行政が進んでいるというふうに思っています。

その上で、私も基本的には特化をしていきたいという気持ちはやまやまでありますけれども、なかなかやっぱりですね、市長ですので、そうはいかない部分があります。その中で、重点的にしたいのがやっぱりこの2つであります。1つ目が楼門朝市です。最初、4月の終わりに始めたときは4店舗で、16人ぐらいしか来んされんやったです。そのうちの半分ぐらいは、うちの親戚やったですね。今が、おかげさまで登録は50店舗で、一番多いときは1,000人を超すぐらいにお越しいただいております。これは楼門で毎週日曜日にやっていますけれども、こういった、ある意味、お金のかからなくて、それでいろんな交流とか、ここで広がりつつあります。こういったことについて努力をしていきますし、私は市民協働という言葉は、まさにこれだと思えます。いろんなところに来ていただいて、物を売ったり買ったりして、これよかったねというふうにやっていくと。これも団体、職員にその負担がかからんごとしていかんばいかなというふうに思っております。

それともう1つが、さっき牟田議員からありましたけれども、G A B B A（がば）です。平均年齢75歳。きょう12時半から、C Dを発表する記者会見をやります。まだ、C Dは実はできておりません。9月17日に先行予約開始ということで、このC Dを出していこうというふうに思っております、これが今後、恐らく高齢者の方々の社会参加、あるいは、こういう一般の皆さんたちが盛り上がる仕掛け、だから、我々がやるべき仕事というのは、単にそういう行事に出てくれとか、そういうのではなくて、例えば、朝市が楽しいとか、このG A B B A（がば）のあれを聞いて踊りたいとか、そういうふうに市民の皆さんに乗って

ただくような仕掛けというのを、私は政治家も兼ねていますので、それを議会の皆さんと一緒に、そういうふうに押し出していくといったことが求められていると。これは、行政の仕事と政治の仕事、ちょっと分けて考えるべきだと思いますので、そういう意味でしていきたいというふうに思っております。

ただ、この線引きは本当に悩んでおります。これをやると、こっちがおろそかになるんじゃないか、私は基本的に慎重かつまじめですので、その辺のですね　よかですか。ですので、そこがいつも揺れ動いております。そこが精彩がないというふうにおっしゃったところかなというふうに自分なりに分析をしております。

以上です。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

私も、最近、牟田君、輝きの増したねと言われて、頭のことやったですね。やっぱり頑張らんぎいかんと、頑張らんぎいかんばってんが、もういっちょ忘れていました。レモングラスもあったですね。レモングラスもありました、忘れていました。ついでに、先ほど市長が言われました副市長制、これを最大限に活用して、特化して突き進んでほしいと。それがやっぱり武雄の観光。観光収入というのはどういうことかということ、市民に与える即金性。即金性というのは、例えば、観光客がふえれば、トイレトペーパー1個からでも1個多く売れる。そこに納入している、例えば、食材の業者さんも、ふえればそのままふえると。観光客は、よそからお金を落としてくれる。そういう即金性、金回り。何だかんだいって、お金が市内で回らんぎいかんというのがあります。ぜひ、そういうふうの特化して頑張ってください、あとのことは職員さんに、もう頼むばいと任せてやっていただけたら幸いですと思っております。

今、副市長頑張ってください、市長も特化して頑張ってくださいということなんですけれども、続きまして、市長にもう1つ特化していただきたいのは財政であります。2番の財政のほうに移らせていただきます。

財政のほうは、これももうさっき壇上で言いました、ないないないというふうな形で言いました。私、議長も一緒でしたが、合併協議会の委員で、新市建設計画、その中で財政計画、平成28年度までの中期財政計画をいただいて、合併に臨みました。今現在の合併後の財政健全化計画の中の今度は平成33年度までの中期財政計画を見ていますと、もう3年後で10億円の差が出るんですね、その建設計画と、合併のときと比べると。これは何でかといったら、扶助費が急激にふえて、交付税が思ったより減少、それにいろんな支出金、国庫支出金等々の減少とかがあります。そういう中で、財政ばどがんかせんぎいかん、ぜひ市長にもこういうのも特化して取り組んでいただきたいと思います。

今回、いろんな料金の値上げ、もしくは値下げとか出てきております。これは、例えば、水道料金、水道に関して言えば、3月議会だったか12月議会だったか、ちょっと忘れましたが、武雄市で余っている水をSUMCO、伊万里市に売ったらどうだろうかと、それを原資として水道料金を下げたらいかがだろうかという提言をしました。これは結局、県と伊万里市が独自で水資源を確保するというので、それはなりませんでしたが、ネクストチャンス。今度は、伊万里武雄地区工業団地構想がありますね。これは、ことし入ってから、企業立地促進法で国が指定して、国に許可された分です。最近、ややもすると、県の財政が厳しいんで立ち消えになるかもしれませんけれども、それをぜひ実現させていただいて、伊万里市と武雄市にまたがった工業団地、水は武雄がやあばいと。なぜなら、伊万里市はもうSUMCOで腹いっぱい、こっちまで持ってくる余裕なかわけですね。まして、いわんや、おとといですね、また百数十億円かけて新工場をつくと。先日、伊万里市の副市長がこちらの議会傍聴にいらっしやいました。伊万里市も、武雄市との境にできる新工業地帯まで水資源をやる余裕なかと私は思います。そこで、多分、その会長は市長だと思います。市長が直接言いにつかかれんけん、副市長さんたち頑張ってますね、その水は武雄がやあばいと、工業用水は今、日量1万トンも余っていないですね、今現在は。五千数百トンでしたっけ、今の余裕は。それ全部やっても、多分足りないと思います。今の県が構想されている、ホームページに載っていたやつだと。そして、極端に言えば、上水道の分まで分けてやってもいいんじゃないかと。それを原資に水道料金を下げるといふうな、そういうふうな何かをつくって下げるというのが今まで市長の手法だったと思います。ただ料金を下げるといふ形じゃない。例えば、仮の話、今度、農排とか公共下水道が出ています。そういうものの原資も、こういうのを充てて下げますよというのがやり方だったと思うんですよ。

だから、極端に言えば、農排もなんとかも全部水準を合わせますよと、そのかわり、この原資が入ってきたときにはこういうふうに下げることができると、だから、今はこれで我慢してくださいというのが今までの市長のやり方だと思うんですね。何か、ちょっと拾ってきたような感じですね、もっと、そういうふうな以前のやっていた市長のときのことを取り戻すじゃないけど、突っ走っていただきたい、そういうふうなところ。さっき市長は、私は慎重かつ何とかな人間ですけどもというふうなことをおっしゃいましたけれども、私は、突っ走って何でんかんでんすつとが市長の特徴だと思うんですよ。だから、そういうふうなこと、原資を踏まえたとの値下げとか、そういうところに持っていかなきゃいけないと私は思います。

さらに、例えば、それだけじゃ原資は足らんかもしれない。ほかのこともいっぱいある。行政需要は山ほどある。先ほど言った扶助費もどんどん大きくなってきている。じゃ、どうすればいいのか。例えば、もう1つの方法は、図書館・歴史資料館、文化会館、市民病院、ややもすれば競輪事業、さらにややもすれば水道事業までアウトソーシング、これは市長の

具約にあったと思います。アウトソーシングを早くして、それだけ市の必要経費を浮かせて、これを原資にこういうふうなサービスをしますよ、こういうふうな料金を下げますよと。右手でそういう原資をつくる作業、左手でサービスを充実、右と左、やっぱりこれが大切だと思います。アウトソーシングを早くしていただきたい。特に、一番早くできるのは文化会館とか図書館、できると思います。それだけで、例えば、前回、財政で質問したときの職員さんの定数計画にしても大幅な減で見込めると思います。そうした場合、原資だけでも1億円以上は軽く出てくると。さっき言ったのをすべてすれば、もう2億円、3億円というのも出てくると。そういうことから考えると、右でそういうふうなこと、左でサービス、それをぜひやっていただきたい。これが2点目。

3点目、もう1つの例えば、原資の作り方はどういうのがあるかと、これも前に言いました。市の職員さんで忙しいというのを、さっき壇上で忙しいと、忙しいというのはもう1つあって、市はいろんなところの事務局をしているわけですね。それと、公民館なんて、通帳なんて1公民館当たり20とか30、いろんな各種団体の通帳を預かれております。市の本庁もいっぱい持っていらしゃると、各種団体の。その総会の世話とか、いっぱいやっていらしゃると思います。そういうのをアウトソーシングできないか。そしたら、市の職員さんも、残業の時間は物すごく減る、本来自分の仕事ができる、さらにそういうふうな時間があるとれば何かに特化してできると。残業代、そういうのに時間とられる、それでも億以上の効果があると思います。そういうことをやって、今度はこういうふうなサービスをしますよと。例えば、公民館の補助金が2,000千円までふやされたというのを今回の議会で知りました。ただ、この原資をどうするのかというのが我々はよくわからない。そういう原資を確保しながら、こうやってやりますよというのがやり方だと思いますし、市長に我々が期待するところだと私は思っております。

市長は先ほどおっしゃいましたように、慎重と思いますけれども、やっぱり行動力とそれの実行力、実行できる力があると思います。ぜひ、そういうところを見て、さっき言いました、右で財源確保、左でサービスの充実、こういうのをやっていただきたいんですけども、いかがなものでしょうか。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

大きく4つあったと思います。

まず、観光面は、これは所得というよりは、むしろ、これはにぎわいだと思うんですね。今まで、我々がちっちゃかったころ、いっぱい人のやっぱり楼門前とか歩きよったですね。このにぎわいを取り戻すには、観光に力を入れるというのが第1。そこで税収がふえるというのは、そう期待できない。それよりは経済波及効果ですね。要するに、観光に従事してい



る方々の所得がふえる、農業生産者の所得がふえるというふうに考えたいというふうに思っています。

次の工業用水については、これは両副市長にもう動いてもらっています。そういうことで、ネクストチャンスだと思しますので、これは私も目を輝かせて、いろんな売り込みに走っていききたいというふうに思っております。

3番目のアウトソーシングです。アウトソーシングは、ひところ、よかよかて、やっぱり言われよったですね。しかし、今、指定管理者制度も入れて二、三年たったときの状況を見ても、これは各地見てみると、かえって高うついとう場合のああわけですね。だから、アウトソーシングして、サービスがよくなって、なおかつコストが落ちているということであれば進めたいと思いますけれども、何もかんでもアウトソーシングというのは、ちょっと今のところ考えておりません。これはアウトソーシングして本当に効果があるんだといったことについて、庁内でよく議論をまずしたいというふうに思っております。

それと、市はいろんな団体の事務局をしている、アウトソーシングできないかということ、これはきょう初めて聞きましたので、これはちょっとこちらのほうで勉強させていただきたいというふうに思っております。

以上です。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

アウトソーシングの件に関しては、何でもかんでもというわけじゃなくて、そうやって取捨選択して効果がある分で着手していただきたいと思えます。先般来、県が23年に破綻するんじゃないかということで、大変、工業団地のほうも危ぶんでいるんですけども、ぜひそういうのも成功させて。例えば、佐賀県というのは、財政悪い悪いと言いながら、ほかの県に比べたらまだいいほうだと私は思います。ほかの県は、とくに佐賀県の状況は数年前にもう陥っているんじゃないかと。

ちょっと記憶は定かじゃないんですけども、佐賀県は以前、大きな危機を迎えた。大きな危機を迎えたときは、1958年に佐賀県は倒産寸前、破産寸前の危機を迎えた。そのときにやってきたのが会計検査員だった池田直さん、知事にやってきたのが。その池田直さんが言われたのは、人命にかかわること以外、全部するなということで、佐賀県を立ち直していただいて、それで佐賀県の財政はよくなりました。その池田イズムを引き継いだのが香月前々知事ですね。それを継承しつつ県の財力を蓄えてきました。その後の井本知事の時代は、それを引き継いで、その当時は、本庁の許可なしじゃないですけども、ちょっとした許可をとれば起債がすぐできるというのは佐賀県と富山県だけだったと思います。それぐらい、その内政面をよくしていただいたと。今は、国の事情、いろんな事情で佐賀県は交付税とか

減らされて、減って、きつい状況にあると思います。だから、そういう中を引き継いだ古川知事は、きっと必ずやってくれると思います。工業団地とかは、この後、金を生む卵なんです。卵は割あぎいかんですよ、やっぱり。そういうふうなことで、大田副市長、ぜひ頑張っていて、何とか成功させていただきたいと思っております。

財政面は以上、提言を終わりました、続きまして、防犯のほうに移らせていただきます。

防犯は、今議会、腹いっぱい出とうです。上野議員の防災無線、上田議員もされました。5億円かかるということなんですけれども、5億円かかっても、合併特例債であれば市の負担は通常より少ないわけですね。ところが、合併特例債を幾ら使っても5億円というのはちょっと余り大き過ぎると。じゃ、どういうふうにすればいいのか。

一、二点ですけれども、前、市長がおっしゃったコミュニティーFMですね。これは災害時に何が一番必要かというのは、皆さん御案内のとおり、情報であります。情報ですね。ちょっと長うなあかもしれんばってん、食料備蓄とかなんとか、それに重点入れんぎいかんとは大都会ですよ。もちろん武雄も必要ですよ、最低限は。食料備蓄とかなんとか、一番必要かとは都会です。田舎はあります。反対に田舎のやつばやあわけですね。でも、一番大切、最優先なのは情報の提供だと思います。情報の提供で、やっぱりこの議会でも、どこに避難せんぎいかんとか、どこに行かんけん、何のあいようとかというのがわからんぎいかん。やっぱり、心理的にわからないとパニックになると。これは災害だけではないと思います。災害だけではなく、有事の際もそうだと思います。有事が絶対ないとは言えないと思います。特に、九州地区は有事があった際にはどうなるかわからないような形で、有事は本当はあっちゃなんですよ。なっちゃなんけど、そういうふうな有事があった際、そして大災害が来た際には、情報の提供というのは物すごく重要な役割を担っていると思います。

今言いました停電したとき、テレビだけではどうしようもない、先般、市長がおっしゃったメール配信も必要だと思います。必要かもしれません。ただ、携帯電話は、この前、そこで、これは大庭部長の携帯ですと見せんさったとき、ちょっとぴぴときたですね。最近の携帯はFMのついとととですね、知とんさったですか。要らんとするても、ついとつわけですよ、携帯に。多分、使っている議員は少ないかもしれませんが。携帯電話に今ラジオのついととですよ。私の携帯、ちょっとあそこ置いとつばってん。私も、そがんとつかんでよかとか、FMも、AMももちろんついとつわけですね。携帯についているんですよ。だから、そういう携帯でついている機能を持ったところは、それだけでも受信機になるわけですね、有事の際は。見せられたとき、ちょっとぴぴときてですね、思いました。これは、そのショップの話で、こがらんラジオつきんごたつとおれ要らんとするても、いんにや全部ついとつですよという言われたですもんね。そいけん、そういうので、ラジオ局というのは物すごく必要だと。

そして、災害のときに、これは一番大切なことだと思いますけれども、だいでん家におる

わけなからすよね。災害のいつ襲うてくっかかもしれんけん。夜は寝とうけん、家にが多かばってんが、昼間、外に出とうですよね、だいでん。やっぱり、外に出て、車のラジオ、携帯のラジオ、手持ちのラジオで、やっぱりどがんだったかというのを聞かんざいかん。そういう中で、そういうFM放送というのは物すごく力を発揮してもらえるものだと思います。

原資で、先ほど前段で出てきている防災無線ですか、防災無線に比べれば、そんなかからない、そんなというか、何分の1、10分の1以下でできるとは思いますけれども、その辺が活用できないかということが1点目。

2点目、若木町、武内町には、既にオフトークという最高の情報伝達システムがあります。こういうのを、そういうので生かせないか。例えば、本機が武雄にあるならば、そのFMというか、中継局をつくってオフトークのほうで使えるというふうな形とか、いろんな方策が使えますから、若木町、武内町はそういうのを使ってできないのか。

この2点をお伺いしたいと思います。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

コミュニティーFMは、今庁内で議論をしてもらっています。ただ、金のかかあわけですね。初期投資で30,000千円から40,000千円、年間維持費としても10,000千円以上かかります。これにちょっと、合併特例債とか補助金が組み合わせられるかどうかは別にしても、これだけの費用がかかるということに加えて、最近、熊本県の玉名市、あるいは宮崎県の宮崎市等が局を閉鎖されています。これは、もう自治体が抱え過ぎて、ちょっとにっちもさっちもいかんごとになったということと聞いております。小規模自治体で、また山の連なっとおです、武雄の場合は。そこで、開局するのはちょっと難しい環境ではないかというふうに考えておりますが、ひとつ、ちょっと私もぴんときたのが、実はこの携帯ですね。携帯にワンセグがああですね。あれに今度、FMの入らしかとですね。ワンセグにFMが。となると、デジタルFMやけんがですね、そがん山とか飛び越して入ってくっわけですね。それともう1つが、ワンセグFMやったら、そこまで費用がかからないという情報が私のところに入っています。そういったことで、どういうことができるかというのは、コストの面と業者の状況を見て考えるべき話で、きのうも上野議員とか答弁をさせてもらいましたけれども、ちょっともう少しお時間をいただければありがたいというふうに思っております。

もとより、そうなると、オフトークと組み合わせが可能になっていきます。それも含めて検討を、もう少しお時間をいただければありがたいというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

開局に30,000千円から40,000千円と、この本ですね、マニュアルどおりですね、30,000千円から40,000千円というのは。これは、コミュニティーFMでやっていこうといった場合に、例えば、スタッフルーム、オフィスルーム、トイレ、給湯施設なんか建てた場合ですね。マニュアルどおりだったです。災害に特化したコミュニティーFM、必要最小限の設備のコミュニティーFM、その中でいろんな情報を、本当は災害ということでコミュニティーFMを建てるけど、それを本当のコミュニティーでその後使っていくというわざができると思います。例えば、いろんな成功したところ、今、失敗された、閉められたところというのは、当初からコミュニティーFMだったんですね、もうそれでやろうということで。だから、災害に特化した最小限の施設でやるという形ですれば、ランニングコストとか、最初のコストというのはもっと縮小できると。さらに、そういう中で何でも地域のやつができるんですよ。うちの猫がいなくなったんで、そこで放送して探してくださいとか、いろんなことで放送して、よそは1コマーシャル500円、ワンコインだそうです。それで十分やっていると、そういう小さいところですね。

それにもう1つ言えば、原資がかからない、先ほどから言っている、武雄市は金のなか、なかという中で、使えるのは、前回私が質問していた頑張る地方応援プログラムですね。頑張る地方応援プログラムは、上限30,000千円というふうな形で前回答えられましたけれども、あれは単年度なんですね。単年度30,000千円だから、翌年も30,000千円　これは3年間です。3年間で、単年度30,000千円ですから、30,000千円、30,000千円、30,000千円です。武雄市の場合は　いや、総務省のホームページにきちっと載っております。単年度30,000千円、継続で、単年度という言葉がちゃんと使われておる。だから、そういうのを使ってやれば、この原資ができるんじゃないかと。武雄市もほとんど出資せずにできるんじゃないか。さらに加えて言えば、そこを運営してもいいよという人があらわれたら、その人に任せられると。そしたら、ランニングコストもできると。一番当初、ケーブルワンにしても、今こんな大きくなりましたけれども、社長と今の専務さんで頑張っていたら、いっしょにやりました。

そういうことで、原資を使わずにそういうふうにとできると。極端な話を言えば、先ほど言いました合併特例債、7割補助が来ると。それがいいか、どっちがいいのかわかりませんが、そういうふうにと、できるだけ原資を使わず、そしてさらに、運営してもいいよという人があらわれれば、そういうふうにと頼めば、市のコストが少なくて済むじゃないか、そして、市長がおっしゃっていたワンセグでもできるんじゃないかと思えますけれども、いかがでしょうか。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

確かに、頑張る地方応援プログラムを私も考えんでもなかですよ。しかし、これですね、

F M局を入れると、ほかにやりたいと思うのがところてんのごと使われんというふうになあわけですね。大体、自治体でのパイの決まっとっけんですね。そいけん、それはちょっとどうかなと。頑張る地方応援プログラムは、大体100%通るんですよ。だから、それはちょっと全体のパイを見て、これは慎重に判断をしなければいけないということと、合併特例債も借金は借金やけんですね。ですので、これも中身的には通るかもしれんですね、これは。実際、合併したときの、何というんですかね、弊害というか、弱さをカバーするという意味では、これはメニューには多分乗るというふうには思っていますけれども、借金は借金だと。

一番、私が心に響いたのは、運営してもいいよという奇特な方があらわれれば、これはもう本当に、ぜひ運営をしていただければありがたいというふうに思うわけですね。私が何よりも恐れているのは、つくったら、やっぱりそれを運営していかなばいかん。運営していかなばいかんということはランニングコストがかかる。このランニングコストを考えたときに、慎重な我々としては、なかなか足を一步出しきらんということにありますので、ぜひこういう方々が背中を押していただければありがたいというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

どっちにしろ、防災体制は整えんぎいかんですね。防災、どっちにしろ、やらなきゃいけない。やらなきゃいけないなら、最小限の投資で最大の効果を上げるやつをぜひですね。今、コミュニティーFMはどうかというのは、これは1つの問題提起です。そういう中で知恵を絞って、できるだけ最少のコスト、最大の効果を上げるような方策を考えていただければ幸いです。頑張ってください。

頑張る地方応援プログラムというのは、いろいろほかにも当てがあるということなんですけれども、9月が第2次募集の締め切りですよ、今月が。だから、もうちょっとこういうのは間に合わないかもしれないんで、来年度、再来年度がありますよということでした。それはいろいろあるということですね。私としては財政にできるだけ負担が少なく、こういうのがあるというのを言いましたけれども、とっくにそがんとは知っとおぼんたということですので、ぜひいろいろ方策を考えてください。

では、防災の件の次の分。

防災の次の部分で、私、消防団ですね、こちら消防団関係の方が多数見えていらっしゃいます。そういう中で、消防団の詰所、そして避難所である公民館、そこにケーブルテレビ、テレビですね、テレビが引っ張れないもんだらうかと、テレビです。というのは、避難所に、例えば、私が知っている公民館でテレビがあるところは少ないです。避難所で、やっぱり情報ばもらわんぎいかんですね。ケーブル回線が一番いいと、地域の情報が流れますので、もちろんさっき言ったFMとかなんとかできればいいんですけれども、ただ、これを、済みま

せん、つくってくださいというわけじゃないです。ケーブル回線とかなんとか、契約金がかかりますね。そして、維持コストがかかります。消防団の詰所にしても、何かあったら災害をそこで待機して見てなきゃいけない、台風情報なんとかというのよ。

そういう中で、市につくってくださいというわけじゃないです。これはお願いしたいのは、そういうふうな、きょうケーブルテレビも映していますね。そういうところに、こういう防災とかなんとかというときには、契約金とか、一番最初の加入金とか、月々の契約料をもう少し何とかならないかという相談を市からできないものかと。市が金を出してということじゃない。相談をできないものかというふうな質問です。つくってくださいというんじゃないです。

やっぱり一番は、つくうとはつくうばんたと、ばってん、加入金とか、月々のランニングコストは、例えば、消防団の詰所なんて月2回ですよ。いろんな行事があったら3回あるかもしれませんけれども、月2回。普通払うたら、契約金というか、月々の聴取料というんですか、あれを払わなきゃいけないと。だから、そういう中で、これは防災ということで、防災の情報提供ということで、何とかそういうふうな加入金とか月々のコストを相談できないものかというのを市からできないものか。それをお伺いしたいと思います。これは市につくってくれ、払ってくれというのじゃないです。そういう相談をやっていただけないものかという質問であります。

議長（杉原豊喜君）

大庭総務部長

大庭総務部長〔登壇〕

お答えいたします。

今議員おっしゃったように、民間の事業ということでやっていらっしゃいますので、市からどうこうという強制はできませんけれども、今おっしゃったようなことについては、今後協議をしていきたいと、お話をつなげていきたいというふうに思います。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

ぜひですね、例えば、台風情報とかなんとか、見たいですね。だから、そういうのがあれば、その地区地区で自分らでそういうので設置してやられるやもしれませんので、そういう渡りをつけていただきたいと思います。

では、防災の面は以上で終わりたいと思います。

続きまして、教育。

教育は、前の議会でもお伺いしました。今、新聞紙上では、中高一貫校のくじ引きに関して、うんだこんだうんだこんだあっているみたいですがけれども、前回、教育長がきちんと県

のほうに意見は伝えるということで、そういうのもひとつあって、こういう議論になったのかなとは思っております。そのことについて質問は、今回はいたしません。今回の質問は、大きく言えば3点。

1点目は、前回質問しました小学校の特区制度ですね。特区制度で、こういうことで頑張っていただけないもんだらうかというのの進捗状況。これは前回質問して、また半年ぐらいして質問すぎんた、まだ進んでいませんというのがちょっとたまに、3カ月後ですけれども、その進捗状況を聞きよかんぎですね、とまっとおぎいかんけん、これはちょっと、進捗状況は今どうなのかということで、これが1点目。

2点目は、中学校とか小学校で携帯は禁止されているところが多いと思います。ちょっとほかはわかりませんが、ほとんど携帯電話は禁止されていると思います。携帯が必要という意見もあるやもしれませんけれども、携帯が禁止されているところが多いと思います。そういう中で、こういうことがあるんですね。部活の終わあぎんた、もう遅うなっですよね。部活の終わあぎ遅うなあ、で、迎えに来てくんさあと。迎えに来てくんさあぎ、今終わったけん迎えに来てくんさいていうて、携帯やったらすぐでくっばってん、携帯は禁止されていると。これは私は適切な処置だと思います。ただ、その時間が集中するんで、公衆電話にずらって並ぶらしいですね、迎えに来てくんさいていうとが。だから、公衆電話の増設をお願いできないもんだらうか。さっき、ケーブルワンさんとかそういうのをお願いできないもんだらうかということで、お願いすっただけでは金かからんけんですね。お願いばやっぱりせんぎいかんと。

これはなぜかというと、公衆電話は今徐々に減ってきております。それは採算が合わない。それは企業論理に沿っています。でも、やっぱり企業にも良心のああとと思うわけですね。やっぱり、教育のために、学校関係にはそういうふうに公衆電話をもう1つ設置してもいいよという良心が残っているかもしれません。やっぱり、学校が大きいところはすごい並ぶらしいんですよ、今から迎えに来てくださいというところが、1台だと。だから、お願いしたいのは、今ある公衆電話の存続と、できればもう1台つくっていただけないかというお願いができないもんだらうかと。これは、さっき言いました企業の良心に訴えなきゃいけないと思います。企業論理から言えば、採算が合わないのは取らなきゃいけないけど、教育というところがありますので、やっぱりあれだけの大企業ですから、シビアな面もありますけれども、そういう社会的な面、ここで一般質問で言いようけん、ひよっとすぎ関係者の見ようけんが、つくらんぎ調子悪かのうと思ひんさあかもしれん。だけんが、そういうのをお願いできないものだらうか。

この2点をお伺いしたいと思います。

議長（杉原豊喜君）

浦郷教育長

浦郷教育長〔登壇〕

お答えいたします。

特認校についての進捗状況ということでございます。

前回お尋ねの件は、主に給食を中心として御質問いただいたというふうに思っております。給食に関するアレルギーの子供たちが以前と比べて非常に多いという状況があるわけですが、ここ数年見ますと、小学校で約30名から40名、市内ですね。中学校で約半数、十四、五名というのがここ一、二年の状況のようでありまして、それに、その子供たちの給食としてはそれを取り除いた除去食というのを準備して対応しているというところでございます。ある学校においては、校長、教頭で検食をしたりするわけですがけれども、何種類も検食をするというようなのも実情です。そういうアレルギー体質の子供たちの給食、そのあたりでかかわっての特認校というお話でございました。

全国、情報を集めまして、確かに、これは栃木県の学校でありましたけれども、67名中、校区外から43名来ていると。しかも、その場合に給食に対する対応ということで非常に注目を浴びて通っているという学校も現実にあるようであります。特認校とした場合には、そのように区外からの通学というようなのも現実のことになってくるわけでありまして、そういうことまで含めまして可能性、そしてアレルギー体質の子供たちへの必要性、含めて検討中というところでございます。

もう1点の電話の件でございますが、今おっしゃいましたように、雨の日とか、部活が遅くなって並ぶという状況を直接、私も見てきたわけでございます。ほかの市でも、携帯を持たせることはどうなのかという論議があっているわけでありまして、現在のところ携帯については禁止をしているというところで、マイナス面を考慮してのことでありまして、ほぼ県内そういう状況かと思えます。

現在、緑の公衆電話があるわけですがけれども、お話にありましたように、採算上、これを増設するというのは今のところ不可能かと思っております。ピンク色の公衆電話、これは設置費用、基本料金は利用者負担であるので、これは設置可能ということでございます。

いずれにしても経費が伴うところでありまして、今おっしゃった企業の良心、ここに訴えるというところは、私も今伺って、なるほどと思ったところでありますので、さらに検討いたしたいというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

進捗状況は、状況調査と検討ということであります。9月議会ですから、新年度に向けて、ぜひ調査からもう一步進むような段階へ頑張っていたいただきたいと思います。

電話のほうも、僕は携帯電話を持たせないというのは賢明なる措置だと思えます。先ほど、



緑が不可で、ピンクは可能だろうと、いずれも経費がかかるからということなんですけれども、緑が不可という判断は、もう1回行かれたということですね、そしたら。多分。私は、そこのところを良心に、不可って、それを何とかというごたあ形で、ぜひNTTさん、よろしくをお願いします。やっぱり、これは教育にかかわっている部分ですから、そういう大企業が、さっき言いましたシビアな面もあると思いますけれども、そういうところに物すごく配慮している状況です。今、環境、教育というのは大企業でも配慮しております。その辺のところを、心の琴線にひっかかるように訴えて、ぜひやっていただきたいと思います。

では、教育の3番目、通学の問題であります。

子供たちが通学していく、例えば、我々、周辺部に住んでいる人間は、学校までの送り迎えが最近は多くなってきたというのは、やっぱり山間地に住んでいて、少子化で少なくなってきた、1人では行かせられないというところ。例えば、町の中では、車が多いんで、例えば、信号機を設置してもらいたいとか、歩道を設置してもらいたいとか、いろいろあると思います。

そういう中で、1つは、道路のそういう歩道とかなんとかというのは行政のほうですから、行政のほうに、どういうふうな状況なのかというのを伺いますし、送り迎えをしている状況をどう思うかというのは教育委員会、この2点を両方伺いしたいと思います。どちらの答弁からでも構いませんけれども。

議長（杉原豊喜君）

浦郷教育長

浦郷教育長〔登壇〕

お答えいたします。

通学に関しては、市民の皆様、本当に防犯体制をしいていただいている。特にここ数年、声かけの事案とか、あるいは不審者対応というようなことで、各学校ともPTAの方を中心に地域ぐるみで対応していただいているということ承知いたしておりますし、ありがたく思っております。

実際に、例えば、今年度4月から8月であります、私どもに報告していただいた不審者対応として2件ございました。1件は、学校内へのいつかわからない時間帯での侵入でありましたので、問題ないかと思うんですが、通学途中にもやはり声をかけられたということもございました。マスコミの報道等を見ましても、なかなか減らない、かえってふえる状況ということ承知いたしております。今後とも、そういうことで、学校や地域でできることとして安全点検、安全マップ、青色回転灯装着車による防犯パトロール、子ども110番の家の配置設置、声かけ運動等々も強力をお願いをしていきたいというふうに思っております。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

1つ、道路整備ですよね、通学のときの。1つは、さっき、教育委員会のほうに、我々周辺部は送り迎えが大変だということで今言いました。町の中は、例えば、新しい道路とかなんかで、ここは歩道ば太うしたほうがよかとか、信号があったほうがいいのか、そういうふうな、何というんですか、歩道整備、どっちかという、我々周辺部の者よりも途中の通学のときの安全確保、信号、歩道橋、歩道の拡幅とか、そういうのがあると思います。やっぱり、交通事故ってやつが一番心配ですから。そういうのの対応とか、あと、例えば、地域住民からこういうふうにしてほしいとかという対応で、どのような例があるのか、そして、どういうふうな対応をされているのか。ちょっと大まか過ぎですね。よかです。

さっき言いましたように、周辺部は送り迎えのほうが大変、町部は歩道橋とか信号とか、そういうふうな設置のほうで、それを進めていかなきゃいけないんじゃないかというふうな意味合いの質問だったんですけども、余り広過ぎて、なかなか答えづらいと思いましたが、それでも。

やっぱり、周辺部と町中心部じゃ、いろんな通学の途中のところでも違うと思うんですよ、その方策が。我々は、送り迎えしている状況とかを将来的に、今おじいちゃん、おばあちゃんが、お父さん、お母さんが仕事なんですから、送っているから、そういうのがもしおじいちゃん、おばあちゃんができなくなったときに、お父さん、お母さんは仕事だからどうなるかなというところまで考えてくださいという意味の問題提起です。中心部のほうは、やっぱり交通安全ですよね。さっき言った、そういうところをやっていっていただきたいと、それが例えば、地域住民から、こういうところに歩道を広げてください、信号機を設置してくれればとか、いろんな要望が出てきます。そういうのの対応はどうなっていますかというところで、ちょっと大き過ぎて答えづらかったと思うんですけども、いいですか。では、お願いします。

議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

樋渡市長〔登壇〕

私も市長になって学んだことがあります。と申しますのも、信号機だったり、あと歩道ですよね、これは基本的に警察のことなんです。私は、優先順位の決まっとうと思うとったとですね。しかし、これは県議さんであるとか、あるいは武雄警察署長さん、北方の出身ですけども、一生懸命頑張ってもらって、今度、川良のところに信号機ができるように、今もう工事が進んでおります。これは、さきの議会で谷口議員から御質問を賜りましたけれども、そういったことで、信号機の工事がもう進んでいる状況を見ると、これは本当にお願いをしておよかったということですね。これは優先順位の上がっとうとですね。もちろん、そこは危険だ、事故があったということも、もちろん客観的状況もありますけれども、やっぱり

一生懸命、牟田議員の質問からもありましたように、お願いをすると、真摯に、こうなると、きちんと頭を下げをお願いするといったことで、あれが早くなったというふうに私は聞き及んでおりますので、そういった意味で、またいろんな地元の皆さんから、全部が実現できるとは思いませんけれども、そういうふうに声を寄せてもらって、自分のところじゃないことに関してもしっかりと首長、あるいは議会、そして我々は2人の県議さんを擁していますので、しかも、片一方は議長さんですので、そういったことで県、あるいは県警本部、国に働きかける、そういう強力な体制が今、武雄にもできつつあるというのを実感した次第であります。

議長（杉原豊喜君）

25番牟田議員

25番（牟田勝浩君）〔登壇〕

ぜひ、お願いしたいと思います。きょうの質問は、最初から、できるだけ予算がかからない、もしくは原資はこうやってつくったらどうかというふうな質問を中心に今回の質問は考えてまいりました。ぜひ、執行部の皆さん、そして市長も大変ですけれども、頑張って、できるだけ最少の投資で最大の効果を生むような形でやっていただきたいと思いますし、市長もまだまだ突っ走っていただきたいと思います。

以上で質問を終わりたいと思います。